

共同研究成果報告

和田 敦彦

一 はじめに

本報告は、2015年度から2017年度までの3年間、国文学研究資料館の共同研究として採択された「ベトナム社会科学研究所蔵旧フランス極東学院資料についての研究」についての成果報告である。研究にあたった研究者、及び所属は、共同研究開始時は和田敦彦（代表者 早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授）、渡辺匡一（信州大学・人文学部・教授）、河内聡子（東北大学大学院専門研究員）、中野綾子（日本学術振興会特別研究員）と、国文学研究資料館の海野圭介（国文学研究資料館・准教授）、陳捷（国文学研究資料館・教授）である。さらに2016年より佐野愛子（明治大学大学院）、西尾泰貴（早稲田大学大学院）、2018年の共同研究補完のための調査には加藤優（早稲田大学大学院）が参加している。

資料の所蔵機関であるベトナム社会科学研究所（Vietnam Academy of Social Science）の社会科学情報研究所（Institute of Social Sciences Information）からは、調査開始時の所長のHo Si Quy（ホー・シー・クイー）氏、その後任のLe Thi Lan（レー・ティー・ラン）氏、そして現在のVu Hung Cuong（ヴァー・フン・クオン）所長のもと、協力、支援をして頂いた。資料の閲覧許可にとどまらず、調査場所や機材の提供、蔵書についての各種情報提供や撮影データの作成、提供を含め、同機関の協力をまず感謝したい。また、調査期間を通して通訳、調整にあたって頂いたNguyen Duong Do Quyen（グエン・ズオン・ドー・クエン）氏、また、資料の保管担当のBui Thi Thai（ブイ・ティー・タイ）氏にも調査グループを代表して、感謝したい。

なお、同資料の調査には、科学研究費補助金基盤研究（C）「読書環境の歴史調査に基づいた近代文学の研究・教育方法の構築」（研究代表者：和田敦彦、課題番号：24520240、2012年度より2015年度）、及び「近・現代東南アジア地域における日本語文献の受容・流通についての研究」（研究代表者：和田敦彦、課題番号：16K02423、2016年度より2019年度）による支援もあわせて受けながら進めてきた。以下の報告では調査の経緯、及びその成果について概観する。詳細な報告は、これまでに論文、口頭発表等で公開されてきているため、それらの書誌情報を「五 研究成果の概要」に掲げ、ここでは要点のみを述べることにしたい。

二 共同研究にいたる経緯

日本の書物は、日本国内だけではなく、国境を越えて世界中に広がっており、欧米にも大規模な日本語蔵書が多数存在する。第二次大戦後の連合国軍による日本占領期には、占領軍の接収資料として、また米国研究機関の購入によって、数十万冊規模の日本語図書が海外へと移動していった。こうした欧米の大規模な海外日本語蔵書については、所蔵機関の研究者と日本の研究者とで協力して研究が進められてきた。

これに対して、東南アジア地域については、こうした日本語蔵書についての調査がほとんどなされておらず、どの国が、どのような日本語資料を所蔵しているのかが明らかになっていなかった。アジア太平洋戦争期には、日本は東南アジアの諸地域を占領し、統治下においていた。この時期には東南アジア各地で日本の出版物が出版、販売、流通し、日本語教育も盛んになされていたことが知られている。しかし、実際にどのような書籍がどれほど流通していたのか、そしてまた、戦後、日本の引揚げ後、それらがどのようなようになったかについての研究はほとんどなされていなかった。

このため、研究代表者は、東南アジア地域における日本語資料の所蔵状況を明らかにするプロジェクトを立案し、国際交流基金や東南アジア各地の研究機関の協力を得、また科学研究費補助金による助成も受けて2012年から継続的に行ってきた。この調査の過程で、インドネシアの国立図書館において、第二次大戦中に日本が作り上げた約1,200冊の日本語蔵書が未整理のまま保管されていることが分かった。また、ベトナムでも約11,000冊に及ぶ日本語文献が、未調査の状態で見逃されていることが分かった。特に後者のベトナムでの日本語資料は規模が大きいため、所蔵機関の協力を得て調査を進めるとともに、国内の研究者や研究機関の協力を仰ぎながら同資料の研究にあたることとなった。

三 研究の目的

本研究は、ベトナム社会科学院の社会科学情報研究所が所蔵する日本語文献の調査、及びその保存、公開の支援を目的とする。

この日本語図書群は、かつてハノイにあったフランス極東学院 (École française d'Extrême-Orient、以降 EFEO) の蔵書を引き継いだものである。以降ではこれら蔵書群を EFEO 旧蔵書と呼ぶ。EFEO、フランス極東学院は、1898年に東アジアの研究を目的とした設立されたインドシナ考古学研究所を前身として生まれ、1900年にはフランス極東学院と改称した。フランス極東学院の日本語資料の収集は、同

機関の教授職で後に三代目の学院長となったクロード・メートル (Claude Eugène Maitre)、そしてその友人であり、極東学院で研究員と司書を兼務していたノエル・ペリ (Noël Peri) によるところが大きい。クロード・メートルは1901年に極東学院の研究員となり、翌年サイゴンに着任、日本研究を担当して、同年からいくたびか日本を訪れ、研究のかたわら、同機関のための書物収集にあたった。古代の仏教建築や文献学についての自身の研究をまとめる一方、日本の国内学会の人的交流も作り上げていった。

また、早くから宣教師として来日していたペリは、日本での書籍の出版、販売事業に関心を持ち、1898年には雑誌『天地人』の発行に加わり、神田で英語、フランス語文献の輸入販売を行う書肆三才社を設けた。日本語、日本研究に秀で、かつ出版・販売事業に詳しくペリは、1907年にはフランス極東学院に勤務することとなり、以降、明治末から大正期にかけて5回 (1907-1908年、1913年、1915-1916年、1918年、1920-1921年) にわたって日本での研究、図書購入を行っている。

1926年にはペリの後任としてエミール・ガスパルドン (Émile Gaspardone) がフランス極東学院に勤務する。ガスパルドンは1930年来日して多くの日本の研究者と交流し、1933年まで中国や日本での研究を継続している。ガスパルドンは1936年にフランス本国に戻るが、同年から金永鍵がフランス極東学院の司書補となって日本語文献の管理にあたる。金永鍵は勤務しつつ、ベトナムや日越関係についても日本語で著作を刊行していく。これら日本語文献に詳しい研究院や司書によって、日本国内での購入活動も活発に行うことで、継続的に EFEO の蔵書構築はなされていった。

1941年には日本はベトナム (フランス領インドシナ) に侵攻し、日本と仏印間の文化交流が活発化する。日本はハノイ、及びサイゴンに日本文化会館を設置し、EFEO との学術交流を展開する。日本敗戦後、この日本文化会館の蔵書も、EFEO に寄贈されることとなった。EFEO は、第一次インドシナ戦争の後、フランスのベトナム撤収とともにフランス本国に移されたが、収集資料群は現地に遺され、ベトナム政府に引き継がれていくこととなった。

現在はベトナム社会科学院社会科学情報研究所が管理している。EFEO 旧蔵書は古典籍から近代の雑誌、書籍を含めて約11,000冊、中国語文献は約31,000冊に及ぶ。社会科学情報研究所は、フランス極東学院から引き継いだ書誌情報をもとに、これら文献目録の整備、電子化をこれまでに行ってきたが、より詳細な書誌情報の作成や、電子化、公開を視野に入れた蔵書全体の分析、調査が必要であった。このため、本研究では国文学研究資料館を共同研究の拠点として、これら蔵書の歴史、構成を明らかにすること、そして同蔵書の目録データの作成、及び所蔵機関に

よるその公開の支援活動を目的とした。

四 研究活動の概観

調査グループによる本格的なこの蔵書調査は2014年に開始された。調査に参加したのは、渡辺匡一、河内聡子、中野綾子、和田敦彦の4名で、8月26日から28日の3日間、ハノイで作業にあたった。事前の打ち合わせや、現地での通訳、調整にはクエン氏 (Nguyen Duong Do Quyen) の協力を得た。クエン氏は日本語日本文学の研究者でもあり、ちょうど本調査と期を同じくして ISSI で勤務することとなり、本研究期間の全体にわたって協力を得ることとなり、本研究には大きな貢献している。同年に所長となったラン氏 (Le Thi Lan) をはじめとする ISSI 側と調査団側とで二度の会議を持ち、調査の基本方針や、目録作成の方法、計画について意見交換をし、詳細をつめていった。こうして行ってきた研究を元として、国文学研究資料館の共同研究公募に「ベトナム社会科学研究所蔵旧フランス極東学院資料についての研究」として申請し、2015年から3年にわたっての共同研究として採択された。それとともに、国文学研究資料館からの陳捷と海野圭介に参加してもらえることとなった。

旧 EFEO 蔵書は、和装本4,083冊、洋装本が5,642冊によって構成されていた。これらのうち、まず和装本4,083冊の目録データの作成を作成することとし、2014年には1,157冊分の書誌データを作成した。また、洋装本については ISSI 側が奥付等の撮影を行い、そのデータを調査グループに送ることで、日本国内で書誌データ作成作業を進めることとなった。

2015年は8月24日から27日にかけて、現地調査を行った。この調査で、さらに和装本2,126冊の目録情報を作成した。また、この年、調査グループと ISSI との間で、互いの協力事項や作成データの利用についての合意事項をまとめ、覚書を交わすこととなった (参考資料参照)。洋装本についての撮影データも ISSI 側から提供された。

2016年は8月22日から25日まで、現地での調査を行った。この調査から、佐野愛子、西尾泰貴が新たに調査に加わった。この年の調査では、和装本801冊の目録情報が作成され、すべての和装本の書誌データの作成が終了した。このため、洋装本の目録作成を開始、同年に434冊の目録情報を作成した。

洋装本については、5,000冊がまだ未処理であり、ISSI 側から送ってもらった撮影データをもとに、2016年から2017年にかけて日本国内で作業を進めた。これによって、洋装本の6割については目録データの作成が可能となった。ただ、撮影データは資料の状態や撮影データの処理の理由から、不十分で、調査グループによる追

加調査、撮影作業が必要となった。このため、2017年の現地調査では、洋装本の書誌データの撮影を中心に行い、その撮影データをもとに日本国内でデータの作成作業を行うこととした。2017年8月28日から31日までの現地調査で、11,453枚に及ぶ撮影データを作成した。これらのデータをもとに、2017年12月26日から28日にかけて、また、2018年3月3日から4日にかけて国内で会合をもち、データの点検、修正作業を行った。2018年3月には和装本、洋装本を含めたすべてのEFEO旧蔵書の目録データが完成し、ISSIに提供することが可能となった。

国文学研究資料館との共同研究は2018年3月に終了したが、調査メンバーは独自に2018年8月にもISSIを訪問し、成果の報告や調査データを補完する作業を行った。

以上の作業は、主として目録の作成に関するものだが、調査グループでは、目録作成と並行して、この蔵書が構築され、管理されてきた経緯についても情報収集を行ってきた。ベトナム社会科学院がこの資料を引き継ぎ、保管してきた経緯や、資料が分散、散逸していないかについての調査も含まれる。蔵書管理に関わった人々の記録について収集するとともに、かつて蔵書の保管にたずさわった人々からの聞き取り調査を実施した。2015年にはNgo The Long (ゴ・テー・ロン) 氏 (1949年生)、2016年にはTran Thi Tuong (チャン・ティ・トゥオン) 氏 (1948年生) からの聞き取り調査を行った。また、2016年には漢南研究所を訪問し、同機関の所蔵資料について調査にあたった。

五 研究成果の概要

本研究は、ベトナム社会科学院社会科学情報研究所が所蔵する日本語文献、すなわちEFEO旧蔵書の調査、及びその保存、公開の支援を目的とする。そのために、これら蔵書、和装本4,083冊、洋装本が5,642冊の目録情報を作成し、所蔵機関に提供した。また、データについては、国文学研究資料館を通して、海外の日本語資料データベース (コーニッキ版欧州所在日本古書総合目録) に情報提供を行うとともに、調査グループによる成果公開として、リテラシー史研究会データベース (<http://www.f.waseda.jp/a-wada/literacy/database.html>) においても公開している。

また、これらの目録データの作成と並行しながら、この蔵書の成立や変遷、さらには含まれている資料の特徴や、個々の資料に関する分析についても、調査に参加した研究者がそれぞれに進めていった。EFEO旧蔵書の管理に、かつて関わった人物からの聞き取り調査や、ハノイの漢南研究所における訪問調査、聞き取りも行うこととなった。これらの蔵書についての研究は、共同研究の開始年度から毎年、

参加研究者によって各種論文、口頭発表の形で公開されてきている。学術論文としては以下の11本と、国際学会での5件の研究報告を成果報告として行ってきた。各論についての書誌情報を以下に一覧の形でかかしておく。

〈論文〉

和田敦彦「ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院資料 東南アジア地域の日本語図書調査から」(『リテラシー史研究』7号、2014年1月、pp.23-28)。

和田敦彦「ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院資料 共同研究と調査の進展」(『リテラシー史研究』9号、2016年1月、pp.1-8)。

佐野愛子「ベトナム社会科学院所蔵の『異国渡海御朱印帳』、『異国近年御書草案』、『異国御朱印帳』、及び『安南記』、『安南来状』について」(『リテラシー史研究』10号、2017年1月、pp.27-31)。

渡辺匡一「ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院日本語資料調査の経過報告」(『リテラシー史研究』10号、2017年1月、pp.19-25)。

海野圭介「江戸時代初頭の出版物を中心に ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院日本語資料調査」(『リテラシー史研究』11号、2018年1月、pp.9-13)。

佐野愛子「日越交流に関わる資料を中心に ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院日本語資料調査」(『リテラシー史研究』11号、2018年1月、pp.15-20)。

中野綾子「『河内日本人会名簿』について ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院日本語資料調査」(『リテラシー史研究』11号、2018年1月、pp.21-36)。

和田敦彦「在仏印文化会館関係資料について ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院日本語資料調査」(『リテラシー史研究』11号、2018年1月、pp.37-47)。

佐野愛子「越南人徐元漢について ベトナム社会アカデミー所蔵『日本歴史略編』および日本語資料群から」(『第3回国際シンポジウム紀要 グローバル化時代における日本語教育と日本研究』2018年10月、pp.449-460)。

和田敦彦「ハノイ日本文化会館資料から見えてくるもの 第二次大戦期の日本の文化外交」(『第3回国際シンポジウム紀要 グローバル化時代における日本語教育と日本研究』2018年10月、pp.484-492)。

河内聡子「ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院日本語資料調査 学会誌・紀要類から」(『リテラシー史研究』12号、2019年1月、pp.17-28)。

中野綾子「蔵書構築からみる日本近代文学研究の姿 ベトナム社会科学院所蔵旧フランス極東学院日本語資料(洋装本)から」(『跨境 日本語文学研究』7号、2019年刊行予定)。

〈口頭発表（国際学会）〉

和田敦彦 Tracing the Routes of Book Distributions: A Challenging Approach in Studies of Japanese Literature, Bakumatsu-Meiji Symposium, “L’Orientale” University of Naples, November 4, 2016.

佐野愛子「ベトナム社会科学研究所蔵・旧フランス極東学院日本語資料調査 日越交流に関わる資料を中心に」Vietnam and the Oriental Culture Exchanges, Vietnam National University, Ho Chi Minh City, November 16, 2017.

和田敦彦 The Gifts Left Behind: Japan’s Cultural Propaganda during World War II in Hanoi, New York, and Rome, Realms of Words, The University of Rome Sapienza, February 27, 2018.

佐野愛子「越南人徐元漢について ベトナム社会アカデミー所蔵『日本歴史略編』および日本語資料群から」グローバル化時代における日本語教育と日本研究、ハノイ大学、2018年10月17日。

和田敦彦「ハノイ日本文化会館資料から見えてくるもの 第二次大戦期の日本の文化外交」グローバル化時代における日本語教育と日本研究、ハノイ大学、2018年10月17日。

七 今後の課題

今回の研究によって、ベトナム社会科学研究所の社会科学情報研究所が管理している日本語蔵書の全容が明らかになった。ただそれは何が、どれだけ所蔵されているのかが分かったということであって、具体的に個々の資料についての研究が深められているわけではない。個々の資料を研究する、いわば条件を整えたということである。それぞれの資料についての詳細な研究は、今後、この文庫を訪れる研究者によってなされていく必要がある。

また、そうした場合に、これら日本語資料を、今後、どのように保存・管理しながら外部に提供していくのか、という点が課題となる。所蔵資料の中には、保存状態のあまりよくない資料も含まれる。長期的に資料を保存していくための方策を、同機関では整備していく必要がある。また、資料をできるだけ広範に活用してもらうためにも、資料保存という観点からも、資料の電子化を今後進めていく必要がある。

ISSI では、今後、EFEO 旧蔵書については毎年数点ずつ、資料の部分的な写真に解説を付した情報を、同機関のウェブサイトで公開していくことを計画している。これに対して、本調査グループとしては、2018年8月の補完調査の折に会合をもち、公開に適した文献の選定と、簡略な解説文の作成を行う形で協力をする事とした。

また、同機関が所蔵している約33,000点に及ぶ中国語文献の調査も課題となろう。これら中国語文献の調査と、今回の日本語文献の調査が結びつけば、日本、中国、ベトナムの関係史を明らかにしていくうえでも大きく貢献していく可能性がある。

※参考資料

「ベトナム社会科学院社会情報研究所における調査業務についての覚書」

日本側で構成された調査団（以下、甲という）は、ベトナム社会科学院社会科学情報研究所（以下、乙という）の所蔵する旧フランス極東研究所関係資料（以下、「ISSI 所蔵 EFEO 日本資料」という）の調査を行い、それに基づいた目録情報、及び撮影データ（以下「作業データ」という）の作成を行う。ISSI 所蔵 EFEO 日本資料の扱い、及び作業データの作成・利用について、甲、乙との間で協議の上、この覚書を取り交わす。

（調査団）

第1条 甲は、以下のスタッフより調査団を構成する。

和田 敦彦 早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授（代表）

河内 聡子 東北大学大学院専門研究員

中野 綾子 日本学術振興会特別研究員

渡辺 匡一 信州大学・人文学部・教授

陳 捷 国文学研究資料館・教授

海野 圭介 国文学研究資料館・准教授

（対象資料の提供・利用）

第2条 甲は乙の所蔵する旧フランス極東研究所関係資料について、2015年から2017年の間、年1回のベトナムでの現地調査、及び甲、乙による会合を行う。

2 乙は現地調査の際に、ISSI 所蔵 EFEO 日本資料の閲覧を許可し、作業場所（インターネット利用環境を含む）を提供する。

3 甲は調査の際に、ベトナム社会科学院社会科学情報研究所における希少資料保管規則に従う。

（作業データの作成）

第3条 乙は、これまでに作成した ISSI 資料の目録（電子データ）を甲に提供し、甲はその目録に正確な書誌データ（日本語書名、著者名、ローマ字書名、ローマ字著者名、刊年）を追加したデータを作成する。

2 甲は作業データを、一年の作業ごとにまとめて乙に提供する。また、3年間の調査終了時には、すべての統合データを乙に提供する。

（作業データの利用）

第4条 乙は、要求に応じて甲の作成した作業データを利用、公開できる。

- 2 甲は、研究を目的とした作業データの利用、公開ができる。
- 3 甲は、目録データに対して前項以外の利用については乙と協議の上、行うことができる。
- 4 甲は、作業データをもとに研究成果（論文、書籍、雑誌記事など）を公開した際、その成果物を乙に二部送る。

（調査における費用）

第5条 甲の調査に必要な旅費、宿泊費については甲が負担し、国文学研究資料館の研究費をもってこれにあてる。

（覚書の有効期間）

第6条 本覚書の有効期間は2015年7月1日から、2018年8月31日までとする。

（覚書の廃止）

第7条 甲または乙のいずれかに本覚書の履行が困難な事情が発生した場合、予め文書で30日前までに相手方に連絡し、甲乙協議の上、本覚書を廃止できるものとする。

2 本覚書を廃止する場合、廃止以前の作業データの取扱いについては、甲乙協議の上、決定するものとする。

（その他）

第8条 本覚書に定めのない事項、及び疑義が生じた事項は、甲乙協議の上、必要に応じて定めるものとする。

本覚書は日本語版とベトナム語版それぞれ2通作成し、甲乙押印の上、各1通を保有する。

2015年7月1日

（甲）早稲田大学教育・総合科学学術院 （乙）ベトナム社会科学院・社会科学情報研究所

調査団代表 和田敦彦〔署名〕

所長 Le Thi Lan〔署名〕

（わだ・あつひこ／早稲田大学）